

授業参観者の授業の見方の違いについて

ビデオ撮影におけるフレーミングと主観

松本 修

はじめに

実践研究の場において、授業参観者は授業を参観する。その際、個々の参観者はそれぞれの授業の見方を持っている。このことは、授業検討会と通常よばれる研究会での発言などから直感的には把握されている。検討会の場では、しばしば、授業における同一の一場面を捉えて対立的な、あるいは視点の異なる見解が述べられるが、それは参観者個々の授業に対する見方の違いとして理解されている。こうした見解の多様性が、授業検討会の話し合いが授業改善に直接つながらないという不満を生む原因ともなっている。

このような授業の見方の違いがどのような背景から生まれてくるかということも検討すべき課題であり、また、そのような違いが授業研究の上でどのように処理されていくのかというプロセスも検討すべき課題である。このような課題に対して十分な解答を用意するには、様々な研究上の課題がある。ここではその準備の一つとして、実際に授業参観者の授業の見方がどのように異なっているのかということについて、ビデオ撮影におけるフレーミングの相違に着目し、素描してみたい。

1 研究の手続き

浦野 (2002:37) は、西之園 (1986) をふまえて、次のように述べている。

…ビデオカメラによって撮影された授業記録は、授業の一部をフレームの中に撮影者が切り取った結果であると思なすこともできる。このように、ビデオカメラという制約から、肉眼による視野よりは狭い範囲を画面の中にとらえざるを得ないために、捉えられた映像記録は撮影者の主観が隠されていると言える。

浦野は「フレーム検討視点群」^{*1}を設定し、複数の撮影者の画像をこの視点群に基づいて比較分析し、主としてフレームに捉えられた対象に着目しつつ、静止画像そのものを提示して撮影者の主観について記述している。

*1 「フレーム検討視点群」は次のようなものである。(p.38)

- ・発言者の有無
- ・フレーム内に捉えられている対象
- ・フレーム内の対象と発言者とはどんな関係か
- ・フレーム内の対象と発言内容とはどんな関係か
- ・カメラワークの特徴
- ・非言語行動

しかし、画像そのものはそれ自体豊富な情報量を持つものであり、分析者が実際には何に注目しているのかは、分析そのものを見て判断するしかない。画像は分析のデータとは言えず、実際のデータは画像から抽出された要素であるべきである。「フレーム検討視点群」は実際には画像以外の要素を含んでおり、分析のデータと分析そのものが混在しているとも言える。もちろん、こうした重なりは完全には排除することはできないが、撮影者の主観の相違を問題にしようとする場合、分析者の主観の問題もまた配慮されるべきであろう。ここでは、画像そのものではなく、撮影者の位置、撮影の方向、フレーム内の主な対象のショットの大きさ、パンニングやズームなどのカメラワークをデータ化し、それを分析対象とすることにする。このことによって、少なくとも分析者が画像の何に注目したかは限定される。

また、同じ理由で、二人の撮影者に後日二つの画像を同時に見せ、撮影の仕方に違いがあると思われる箇所について分析者がインタビューし、そのプロトコルをもデータとした。撮影の仕方そのものには、習熟の問題や、光の方向など、直接授業の見方にかかわらない要素も影響する。再生されたビデオ画像という刺激に対応する内観報告にすぎないが、参観者の意識を言語化したデータを参照できるようにした。

以上のような考え方に基づいて、次のような手順をとった。

(1) 上越教育大学附属中学校で実施された国語科授業の一部分を二人の参観者にビデオカメラによって撮影してもらおう。機器操作には通常のレベルでの習熟がある。二人には自由に撮影するよう依頼した。

授業データ 日 時：平成13年3月13日2時限（3時間単元の第2時）

学習者：上越教育大学附属中学校1年

授業者：松本 修

教材：芥川龍之介「トロッコ」

撮影者 40代男性S 現職派遣教員(小・中学校で約20年の教職経験あり)

20代女性K 学部3年生(小学校での実習経験あり)

(2) 二人の撮影したビデオテープを二台のモニターで同期させて視聴し、分析者(授業者)が興味を持った点についてインタビューし、その様子をビデオ撮影する。インタビューはなるべく授業の直後に実施したいところであったが、諸事情により、3月26日に実施した。

(3) 授業時のビデオ、インタビューのビデオに基づき、発話をトランスクリプトしてプロトコルデータとする。

(4) 二人の撮影に相違があると考えられる箇所について二人のカメラワークをデータ化する。

(5) 二つのプロトコルデータ、カメラワークのデータをもとに、参観者の見方の相違について分析する。

本論においては、典型的と思われる部分のデータを提示し、それについて分析することとする。

2 授業データ

分析対象とした授業の一部分のプロトコルは次のようなものである。トランスクリプトにあたっては、次のような書式を用いた。^{*1}

記述の方法

- ・発話の単位は、間と内容（提題表現＋叙述表現）によって認定する。内容的に一連の発話は連続して記述する。
- ・発話には発話番号を付す。
- ・発話者をアルファベットで示す。
- ・漢字・平仮名・片仮名交じりで表記する。

記号

- ／／ 発話の重なり。直後の／／の後の発話が重なっている。
- = 途切れのない発話のつながり。直後の＝の後の発話がつながっている。
- () 聞き取り不能。中に記述のある場合は、聞き取りが不完全で確定できない内容。
- (3) 3秒の沈黙。
- (.) 「、」で表記できないごく短い沈黙。
- : : 直前の音がのびている。
- 直前の音が不完全なまま途切れている。
- 、 発話中の短い間。プロソディー上の何らかの区切りの表示を伴う。
- ? 語尾の上昇。
- 。 陳述の区切り。語尾の下降などのプロソディー上の区切りの表示を伴う。
- _____ 下線部の音の強調（音の大きさ）。
- ° ° 間の音が小さい。
- (()) 注記

データ

- S9: 「回した」から良平が（ ）こっからは、説明じゃなくて今度は（ ）だと、このときはそう思ったんですけど今はえっとみんなの意見を聞くと3人とはちょっと違うかなと思っているところです。
- T10: やっぱり三人称だと、ようするに迷うんだよね。ひやっとしただと、なんでひやっとしたことが他人にはわからないんだということがありますが、そうするとですね、ようするに、両方の見方があるいは最初からね（ ）、で大事なのは、なんでそう判断するのかということ、あの皆さんが書いてもらったのを見るとかなり根拠が書いてあったと思うのですがうまく説明し切れてない、さっきいったようにね、「見る」とかいうその感覚に関わる表現のもの、それから思ったこと、考えたもの、感じたことに

*1 西阪 仰 (1997)、好井裕明・山田富秋・西阪 仰 (1999)、野村眞木夫 (2000) などを参照した。

関わる表現も実は関わるのですね。それから、え：：あの(3)えっとですね、いわゆる「た」という表現と「ならんでいる」、これ着目した人いますかね。(3)「た」という表現と、「ならんでいる」という対立ですね。「～した」という表現と「～している」との違いですね。当然「～していた」という表現になりますけど。これちょっと感じが違うんですね。そうすると「～した」が説明で、「～している」のがそうではないということができる場合もある。どこを自分が判断しその考えを、無意識なんです。根拠にしたかもう一度考えながらですね、それぞれ自分が考えたものを発表しつつ話し合いをしてもらいますが。Aについては、今のよういろいろ()は出てきました。Bはですね、Bはほとんどの人がわりあい一致していて、これは何でかというんですね、まあ、話し合いをしてみればわかると思いますけれど、Bの部分の傍線部の終わりのところにですね、終わったところにですね「と同時に、良平の頭には」と「同時に」という表現。それからその部分の最後の「急にはっきりと感じられた」という「感じられた」の表現、まここから見ると、良平が感じているんだから、それが同時になんだから、これはやっぱり良平なんだろうということがどうも書かれています。え：：(3)ただですね、え：：ちょっとかかわってあと二人ほど質問を。Kさん、これに関わってなんか書いていたよね。Aのところですね。全部読んで下さい。

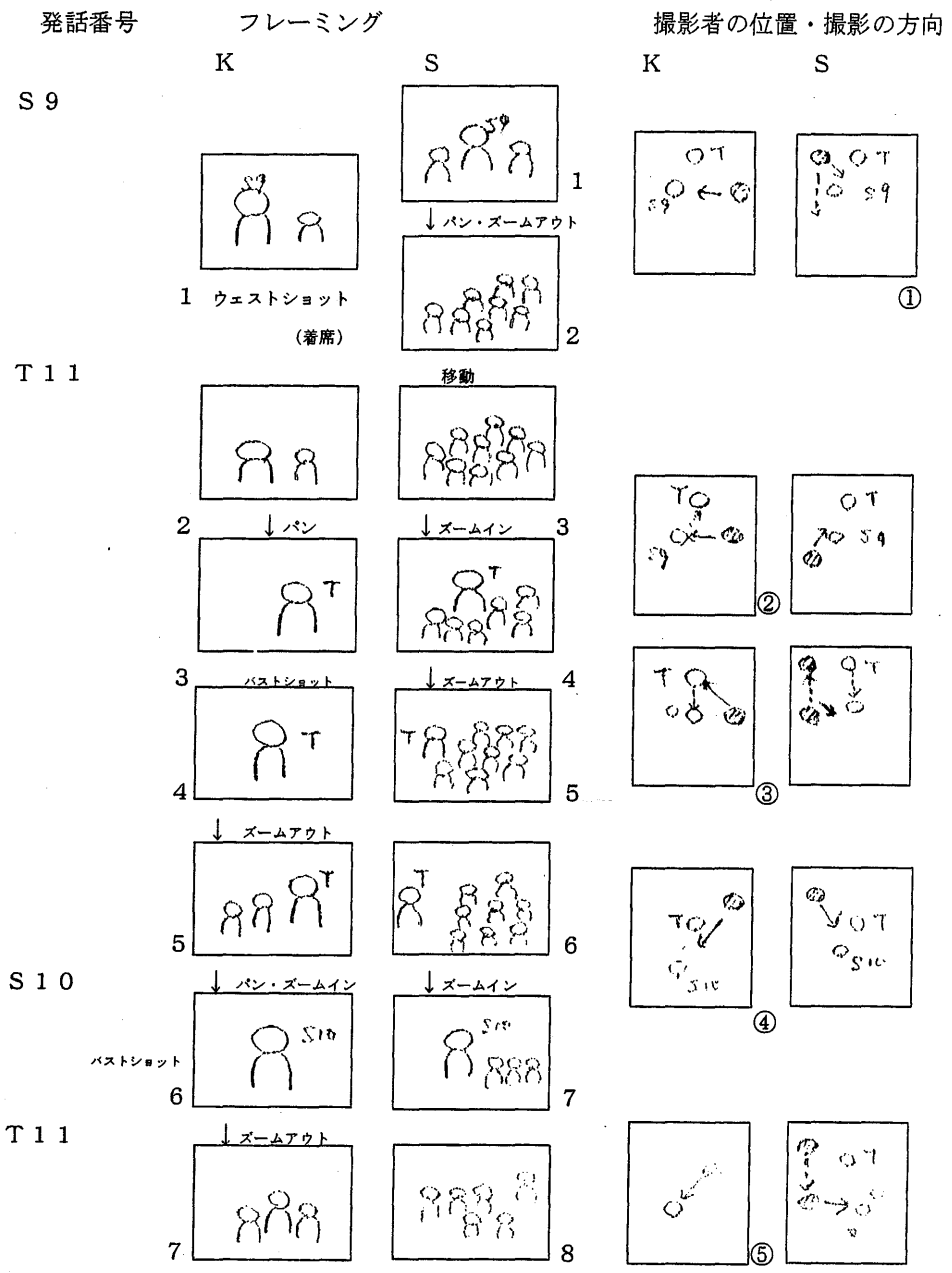
S10：えっと私は、誰の目からと言うのは、トロッコの目から見たと思います。根拠は、私は良平たちだと思ったんですけど、良平たちの目から見ているのなら、「トロッコは泥だらけになったまま薄明るいなかにならんで『いた』」になると思うんだけど、ここは「ならんでいる」なので、自分の事かなと思ったからです。無理やりかなと思うんですけど、並んでいるのなら()、Aの文の後のほうに三人の子どもは、と別みみたいな感じに書いてあるのがトロッコかなあて。

T11：はい。あの、説明はね、さっき僕がちょっと触れたように、「たと「でいる」は違うじゃないかということに着目している。で、そこに着目してトロッコかなを言っていました。ようするに人間じゃないだろうという感覚ですね。人間が見たんじゃないだろう、そういう、そのことも実は語り手をどうゆうふう想定するかということですね。語り手というのはなんだという、語り手のイメージに関わるんですけど、つまりちょっと人間じゃない、カメラの目が見ている、そういうイメージをおそらく感じたんじゃないかなと思います。最後、TG君のBの方で、疑問のまま書いてありましたが、ちょっとそれ読んでみてください。根拠も加えた？じゃあ、それをちょっと読んで。

授業者は、前時に学習者の書いたワークシートの記述をもとに、何人かの学習者を指名してその記述内容について問答しながら、語りの把握の仕方のパターンについて学習者全体に一定の理解を構築しておこうとしている。この後のグループ討議のために地ならしをしている段階である。従って、授業者と指名された学習者との一対一のやりとりを他の学習者は聞いているという学習形態になっている。

3 カメラワークデータ

撮影者の位置、撮影の方向、フレーム内の主な対象のショットの大きさ、パニングやズームなどのカメラワークは次のようになっている。



Kはほぼ固定した位置から指名された学習者と授業者を交互にとらえながら、ズームインとズームアウトを用いている。Sは撮影位置を教室再前方から中程まで移動させながら、授業者と指名された学習者とを交互にとらえながらも全体として引き気味のショットで複数の学習者をフレームに収めている。フレーミングでは、S5とS6の間、S7とS8の間でも小さくパンを用いて授業者を収めたり学習者を中心にしたりしている。

4 刺激回想記録

撮影者のS、Kと授業者(T)とで授業ビデオを同期させて再生し、モニターを見ながら、必要な場合は再生をとめて自由に会話した記録をとった。記録をトランスクリプトし、便宜上今回の検討場面のみプロトコルを1からの通し番号で提示した。なお、下線は、分析に直接関わる部分に付した。

1 T (右の画面を指し)今の発言に対する全体の反応を見てる?

2 S そうですね。ななめ…今下向いてるんですけど、おさげにした子が、よく人の意見を聞く子なんで、それを一緒に撮っていて、ちょっと全体どうだったかなというのを確かめたと思います。

3 T これはぼくの反応も、とろうとしてるわけ?

4 S そうですね。

5 T ()

6 S 見てますね。安田君の辺りとか。この時間は4、5人気になる子がー

7 T ああ

8 S いたあとなんで。前の時間は様子が分からなかったんで2人ぐらいだった。

9 T Kさんは、あの、佐藤さんの反応を。

10 K そうですね、ちょうど見える位置に。

11 T そう。

12 T これはたぶん、僕の授業が止まりかけたのでみんな僕を撮ってるんですか。(笑い)

13 S たぶん、この子の表情と比べてるんだと思います。

14 T ああ、なるほどね。

15 S 一番佳境のところですよ、説明が。

16 S ここは発表した子が4人入ってるんで、発表した子たちが//どんな反応しているんだろうと、ええ、そんなこと、思ってますね。

17 T //ああ

18 T -()

19 S ダイコクさんと、その、直線上、延長線上にいる。

- 20T この生徒の場合、言ってることが分かっているんだか、分かっていないんだか、よく分からないん／＼だけどー
- 21S ／＼ ((笑い))
- 22T わりかし聞いていることは聞いているんだよね。
- 23S ですよ。
- 24S これは安田さん、大黒さんあたりを入れようとしているんですよ。
- 25T ああなるほどね。
- 26T Kさんは、やっぱり、発表した人の反応を、やっぱり、／＼常にとりに行ってますよね。
- 27K ／＼ああこれについてどんな表情しているのかなあ。
- 28T んー、って思うよねー、んー。
- 29S うん。

5 分析

全体として、ビデオのフレーミングはS、Kとも、当初授業者を撮影しているが、授業者と学習者の発話が交錯する場面で明らかな違いが見られる。すなわち、Sはある程度のグループに焦点を絞るように変化する。その意図は、刺激回想記録の、6Sの「見てますね。安田君の辺りとか。この時間は4、5人気になる子がー」とあるように、学習計画と、前の時間における参観を反映させて、観察対象として絞り込まれた学習者があり、そこに焦点化しつつ学習者全体の反応をとろうとするところにある。Kは発話者を中心としたフレーミングである。

教師の発問に対し、ある生徒(S9)が発言し終え着席した直後に、二人の撮影者のフレーミングに顕著な差違が認められる。発言中は共に発言者のクローズアップであるが、発言後、Sはパンニングし全体を、Kはそのまま発言した生徒の表情をアップで追っている。

刺激回想記録によれば、Sは、発言に対する全体の反応を確かめるため、またKは、ちょうど見える(撮影しやすい)位置に発言者がいたためであると述べている。これによれば、Sの関心は「発言に対する全体の反応」であり、授業の流れを意識した教師の視点に近いと言える。また、Kの場合は、単に撮影しやすいというだけではなく、「発言後の発言者の反応や表情」(26T~27K)をとらえようという意図が働いていると思われる、授業の流れよりはむしろ、生徒の内面に関心が向けられていると言える。この場面にその差違が最も顕著に表れていると思われるが、他の場面においても、Sが全体を、Kが個をフレーミングする傾向が認められ、その背景にもこのような関心の違いがあると推定できる。

一方で、2SにおけるSの発言から、全体を撮影しつつもその中のある生徒に意識が向けられているということがわかる。これはフレーミングからだけではわからないことだが、Sの場合、関心を寄せる特定の生徒が存在し、授業の流れの中で、全体を意識しつつも、

それらの生徒の反応を中心にしようとする一貫した傾向がある。これは、15Sにおける「一番佳境のところですよ、説明が。」という発話にもあるとおり、学習計画における授業者の意図の達成を見ようとしていることによる。

Kの場合にはSのような特定の意図というものはあまり感じられず、授業の流れに従って自然に関心の対象を追うという傾向があり、学習者と同じような意識でフレーミングを行っているものと思われる。「発言後の発言者の反応や表情」を収めようとするのは、学習者の発言のあと、その学習者に対する授業者の発言を聞いている、その発言した学習者の心理によりそっているものだとも判断できる。

このような傾向は、授業者の移動にあわせてSが撮影位置を変更しているのに対して、Kは撮影位置を変更させていないこと、Sのフレーミングが対象を主として周囲の学習者などをも含めたフルショットで捉える傾向があるのに対して、Kのフレーミングが対象をウエストショット、バストショットで捉える傾向があることにもあらわれているといえよう。

刺激回想記録の最後で、感想を聞いた場面では次のような発話が見られる。

- ①T (Kさん) ちょとどうですか、感想。今ちょつと比べて。
- ②K いやーあたしもっと生徒の反応いっぱい取ればよかったなー。
- ③T うん。っていうか、例えば実習先なんかはクラス全体の反応ってのが気になるか、それともやっぱ(気になってる)生徒の反応が気になったかー
- ④K あー：：自分の中で：：気になるなっていう子がいたんですけど、あ、でも全体もとらなきゃかなとか。
- ⑤T それは授業やってる時の感覚もあるかもしれない。
- ⑥K あー。

1) S そうですね。あの：：(この日)は、さっきもちょつと言いましたけども、気になる子が(.)前の日より少し増えてるので、／／えー、前日は大黒さんとそれからもうひとりその斜め後ろで、今日はグループになってるので後ろ向きになって最後の方であの一、こう二人を見ていたんですが、この日は、えー4・5人になってこのターゲットにする：：子を中心に先生の説明の場面は：：撮っていたと思います。やっぱり：：あの：：自分が授業してる時：：の見方に少し似てるかもしれないですよ。

2) T ／／あー、はいはい。

3) T はあはあはあ＝

4) S ＝全体もチラチラ見ながら：：こうその子たちの反応を確かめて：：えー、じゃあどう進めるかということ(。)考えているのかな：：と(。)思いますね。で、やっぱり、あの安田君の今、切れてますけど、あの、最初にしゃべっていた眼鏡かけていた子(。)は、こう反応が割と鈍かったり、気だるそうしてる子だったので((笑い))、あの子あたりにも()たのかなあと／／

こうしてみると、Sの参観の関心が、学習計画の意図と、数名の関心の対象となる学習者を中心とした学習者反応との関係にあるのに対して、Kの関心は、学習過程における学

習者の意識にあるというようなことが大ざっぱには把握できよう。このことは、十分な教師経験を持つSと、実習の経験しかないKとの経験の差に起因するようにも思えるが、そう断定することはできない。教師経験を持っていてもKのような関心を持つことは、あり得ないことではない。また、それぞれの関心の持ち方は、それぞれの授業参観における授業の見方を規定するものであるとは言えようが、どのような関心の持ち方が望ましいということとは言えない。

おわりに

ここでは、授業参観時における参観者の授業の見方の違いを、ビデオ撮影におけるフレーミングなどをデータとして素描した。限られた一場面を抽出した分析に過ぎず、今後、複数の場面を分析したり、もっと多数の参観者の見方の違いを検討する方法を案出したりすることが必要となろう。こうした課題をクリアしながら、授業研究が効果的に機能する条件について検討し、授業検討会のあり方に関する知見を得ていきたい。

文献

- 浦野 弘 2002.3 「授業研究におけるビデオの活用—同一授業の記録の差異に着目して—」『平成13年度客員研究員研究報告』上越教育大学学校教育総合研究センター
- 西阪 仰 1997 『相互行為分析という視点』金子書房
- 西之園晴夫 1986 『コンピュータによる授業設計と評価』東京書籍
- 野村眞木夫 2000 『日本語のテクスト—関係・効果・様相』ひつじ書房
- 好井裕明・山田富秋・西阪 仰 1999 『会話分析への招待』世界思想社
- 渡辺 浩 2001 『ビデオ・レッスン 撮り方・楽しみ方』岩波書店